
桜の木

春の奇跡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の木

【Zコード】

N6140E

【作者名】

春の奇跡

【あらすじ】

ハルは昔、ぜんそくで入院していた。それを昔から励ましてきた桜、この二人の関係は今後どうなるのか??そして桜が隠し続けてきたものとわ・・

(前書き)

この小説を書くのに1年半かかりました。
見ずらい小説かもしませんが読んで頂ける読者様、本当にありがとうございます。

読者様の感想をもとに続きを書きたいとも思っています。
ではお楽しみ下さい。

俺にとって、桜の木は特別な存在で、いつも何かあつたらここに来て、心を落ち着かせていました。春が終わる頃に桜の花びらが少しずつ散っていくのを見ると、何か心細くなる。

俺の名前は、
安木知治。高校2年生で、昔から友達と比べて少し体が弱くて、小・中学校の時には入退院を繰り返していました。今は入院する程でもない

が、体が弱いせいか、とても泣き虫であまり自分に自信が無かつた。そして、俺が入院していた病院の近くに桜の木があつた。喧嘩したりなんかして良く泣いていた俺を親がだっこして桜の木に連れて行ってくれた。なぜか桜の木を見ると俺はすぐに泣き止んだらしい。それから俺は退院した後でも桜の木を何度も見に来たりしていました。高2の春、久しぶりに桜の木を見に行こうと思つた。その帰り道、誰かが後ろからついてきた。俺はわざと氣づかない振りをして歩いていた。歩き続けると、いきなり後ろからドンッとぶつかってきた。

「さつきからついてきたのに何で気づかないんだよ！！」といつて頬を膨らましてた。こいつは水木桜。ミズキザクラ幼稚園から小・中・高といつも一緒の幼なじみだ。桜は家が近く、小さい頃は、よく遊んでいた。俺が入院しているときも、週に3回くらいは病院に来てくれていた。桜は俺と違つて、めったに泣かず、強がりでよく泣かされていた。

でも、そんな桜に俺はいつも支えられていた。一人で桜の木でおまごとしたり、ベンチに座つて手を繋ぎながらたくさん話をしていた。

今考えると手を繋ぐなんて・・・・考えられない。

「一緒に桜の木見に行くか？」と聞くと、桜は嬉しそうに「もちろん！！」と答えた。桜の木を目の前にして、二人とも何も言わないまま桜の木を見つめていた。「なんか、懐かしいね！！昔

は、あんなにお互い小さくて桜の木がすごく大きく見えたのにね、お互いこんなに大きくなっちゃって」と桜が言った。

俺は、笑みを浮かべながら、

「桜は昔の方が可愛かったな！！顔は変わったけど、強さは変わらないな」その瞬間、桜は俺の頬をつねつて、

「ハルはいつまでたつても弱虫なくせにい！！誰がいつも助けてやつてんですか？？3秒以内に答えなさい」

「はあ？？いつもお前に泣かされたんだろうが！！このいじめっ子」と言つて、桜の頭をコツンと叩いた。夕日が落ちそになつていて、二人でバカみたいな話をしながら桜の木を後にして帰つた。春休みの終わり頃、俺は友達の洋介と和樹と一緒に春休みサヨナラパーティーをしていた。和樹は桜と同じく、昔からの幼なじみで、洋介は高校に入つて初めてできた友達だ。

そんな仲のいい3人で、お菓子を食べながら、残りの高校生活について話をした。洋介が

「お前らこれから進路どうすんだ？？」と言つた。

先に口を開いたのは和樹だつた。

「まあ俺は大学行つてハーレムに過ごすかな、ハルわあ？？」

「俺は・・・・・・まだ決まってない」本当は看護士になりたいと思つていた。

今までずっと病院にいたから、今度は俺が苦しんでる人を助けたいと思っていた。だけど、なんか恥ずかしかつた。「洋介は？」とつさに洋介に聞いた。

「俺は好きな人と結婚して、のんびり暮らせたらそれでいいんかな」以外な答えに俺と和樹は笑つてしまつた。洋介は照れながら

「こんな夢で悪いかコノヤロー」と言つて顔が真つ赤にしていた。顔を真つ赤にしている洋介に和樹が

「そんで好きな人は誰なわけ？？」

洋介は少し考へて

「・・・・水木桜」

沈黙が続いた。

なぜだろう。なんか悔しい。

「じゃあ告白しちゃえよ！お前なら付き合えたって」がむしゃらになつて言ってしまった。

「マジ！…告白してみよっかなあ サンキュー！」そんな洋介の言葉にイラッとしてしまった。

洋介の家から帰る途中、

「お前桜のこと好きなんじゃないの??」和樹が言つてきた。
「はあ？？なあに言つてんだよ！！俺が桜を好きならとっくに付き合つてるよ！洋介とお似合いじゃん」「俺は桜に恋愛感情があるわけではない。でもいつも一緒にいたから……。
「そつか、ならいいんだけどなーお前らかなり仲良いから気になつただけだよ」

「・・・俺は何も言えなくなつた。和樹とも
「じゃあな」とあいさつを交わし家に向かつていると、無性に桜の木を見たくなつた。

「春も終わるし、桜が散る前に見に行くか」そう思ひ、桜の木へ向かつて歩いた。歩いていると、騒いでいる声が聞こえた。桜の木の近くだ。

歩いていたが不安になり走り出した。

すると、その桜の木の前で20代の若い人が団体で花見パーティーと言つて、タバコを吹かし、酒を飲みながらやりたい放題やつていた。

すると一人の男が桜の木にタバコの火を押し付けた。それを見た瞬間、体が勝手に動いた。

彼らの前に行き、声を震わせながら

「な、なにをやつてるんですか??」足がかすかに震えていた。

「ああ？？俺らが楽しんでんのに、てめえに邪魔する権利あんのか

？？

俺は一瞬桜の木を見た。その桜の木が泣いてるように見え、

一気に恐怖が無くなつた。

「俺が守つてやる。」 そう小さく呟いて、

「ここはあんたらの来る場所じゃねえ！！早く帰れよ！！！」

「へえー君いい根性してるね！俺らとやるつてか？？ガキが何言つてんだ！笑」

俺は無我夢中になつてしがみついた。

何度も殴られ、振り飛ばされたりしても俺はしがみついた。

「俺が・・・守つて・・・やるから」

「気持ちわりいな！行くぞ！！」 そう言つてこっちを見ながら帰つて行つた。

俺は意識がもうひとつとしていた。

すると、遠くから

「ハル？？」 かすかな小さな声がだんだん大きくなつて、誰かに抱えられた。

ぼやける田をパチパチさせていると相手の顔がようやく見えた。

「・・・桜」

桜は目に涙を浮かべていた。

「大丈夫？？ハル・・すごいよ！！」 そうすると、遠くから

「ハル？？」 かすかな小さな声がだんだん大きくなつた。そして、誰かに抱えられた。

ぼやける田をパチパチさせていると相手の顔がようやく見えた。

「・・・桜」

「大丈夫？？ハル・・すごいよ！！」 その時、桜の目から涙がポツリとこぼれた。

桜が泣いてるのを見たのは初めてかもしれない。

「なんで泣いてんだよ？？」 と聞くと、桜は涙を吹きながら

「うちね、見てたの！本当はハルが来る前からあの団体が騒いでるの見てたの！でも怖くて注意できなくて近くの木に隠れて見てることしかできなかつた。・・・そしたらハルがすごい目で走つていつて・・・うち、あんなハル見たの初めてだつた！！あんな強いハル見

るの初めてだつた！！喧嘩は弱いのわかつてゐけど、気持ちは強かつた！

そして、初めてハルに泣かされたよ？？」

その言葉を聞いた瞬間、俺も涙がでてきた。

「俺が泣き虫なのは変わらないけどなあ」

桜は涙を流しながら笑っていた。そして、桜の涙が頬をつたつて、ゆっくりと落ちて俺の口の傷口に当たった。

「痛っ・・・！」とてもしみた。

「それは、うちの魔法の薬！！すぐ治るよ」

何故だろう・・・・・・アキドキした。

好きなのか？あの涙を見てから桜の顔を見るのがとてもなく緊張した。

「一緒に帰るー！」桜はもう泣き止んでいた。俺も笑顔で

「おう！！」と答えた。

桜の木から何メートルか離れてからも、一度振り向いて、桜の木を見た。

「俺、桜が好きなんだな」そう語りかけると、桜の木は嬉しそうに揺れているように見えた。次の日、俺は傷だらけの顔に絆創膏を貼つて学校に行つた。

「お前その顔どうした！？」朝からこのくらいの言葉を聞いたらどう。

教室入つてからも和樹と目が合つた瞬間嫌な予感がした。

「お前その顔どうしたんだ？？」

やつぱりそうくると思つた。

「何でもねえよ！？」説明なんかできるわけない。昨日のことを思い出すだけでにやけてしまつ。

すると、また和樹が

「あのさあ」と言つてきたが、和樹が喋つてる途中にまた傷のことだと思つたけど、

「だからなんだよ？」と機嫌悪そつと和樹の目線は、桜の席

にいった。そのまま俺も桜の席に目をやると・・・桜がない。そして、洋介もない。「洋介が今日告白するって言つて、桜を連れ出してどっかに行つたぞ！！」和樹がちょっと不安そうに言つた。
俺は焦りはじめた。一人を探そうとした。しかし、桜と洋介は笑顔で教室に戻ってきた。桜の笑顔を見る限り幸せそうだった。桜と目があつたが、俺はすぐに目をそらした。

急に不安になつた。洋介は優しい、顔もいい。彼女がいて当たり前だと思われるくらいだ。

洋介が俺のところにきて、

「ハッチのおかげで告白できたぜ！！答えはまだ聞いてないけど、俺は幸せにしてみせる！！」そんな男らしい言葉が心に響いた。
俺はどうせ男らしくなんかない。ただの弱い男だ。そう思つと昨日ことを考えると逆に辛くなつた。

その夜、桜からメールが来た。

「会えないかな？？8時30分に桜の木で待つてる！！」

俺は不安になりつつも、走つて桜の木へ向かつた。
桜の木にたどり着くと、桜笑顔で立つていた。

「何があつたの？？」投げやりに聞くと

「今日ね、洋介君に告白されたの。付き合つていいと思つ？」
この言葉に力チンときた。

「そういうのつて俺に聞くもんじやないだろ？桜が付き合つたら付き合えば？？まあ元気だけがとりえの桜なら洋介が似合つんじやない？幸せにしてもらえよ！俺のことそれだけで呼び出したの？？くだらないね！こつちだつて忙しいんだよ」
俺は何を言つてんだ。こんなこと言いたくないのに。

「・・・」桜は黙つていた。数分して

「俺帰るね」

そう言つて帰ろうとした。

その時、桜が泣いた。今度は嬉し泣きなんかじやなかつた。

桜の悲しそうな顔、辛そうな表情は一目みただけで分かつた。

「そうだよね！いきなり呼び出してごめん。うち幸せになる！」
それだけ言って走つて言つた。桜は俺が好きつていうの待つていたのか？それとも応援してほしかつたのか？

もう何も分からなくなつてきた俺は桜の木の前に座つた。

「俺はどうすればいい？？」問いかけても何も答えてくれない。そして、俺の恋が終わつた。春の終わりに散つていく桜の花びらのように、なにか大切なものを失つた。あれから1ヶ月くらいたち完全に桜が見えなくなつた頃、俺は桜の話すことをしなくなつていた。未だに洋介と付き合つていて、毎日お昼ご飯を一緒に食べていた。桜は俺のことは何も考えてなんかいだろう。だけど、俺の心の傷はまだ残つていた。悔しさと後悔の気持ちでいっぱい、桜のことをしか考えれない。遂1ヶ月前まですごく仲が良かつたのに、今はまるで他人のようだ。

俺は後ろの席から洋介と楽しく話をする桜を見ることしか出来なかつた。

「全くー見てらんないなあ 安木知治君！！」 桜の友達の芳江だ。
「つるせえなあ！！あっち行けよ！おばさん！」 芳江は高3のわりにはふけている。

「どうせ桜が好きなんでしょう？」

ドキつとした。

「ばあか！！俺が桜を好きなわけねえだろ！あんな強がり女は洋介しか好きなんねえよ！」

「どうだかねえー最近ハル元氣ないぞ！」 和樹も会話に入つてきた。

「お前らに関係ないだろ！！」 強がることしかできない。

「ハルは我慢すると涙目なるから一発で分かるよ！」 芳江が笑いながら言つた！

「なんかあつたら俺でも芳江でも頼れよ！！俺らは味方だぜ！」 今俺にとつて、この一人の言葉がとても嬉しかつた。

「ありがとうな！でも今桜が幸せならそれでいいんだ！洋介なら幸せにしてやることができる！桜さえ幸せなら俺も満足だ！」

気持ちが楽になり、俺にはいい友達を持つていると思い、また涙目になつた。

その日の帰り、俺は見てはいけないものを見てしまった。

洋介が桜ではない、他の女の子と歩いていた。まさかと思い後をつけてみると、誰もいないうな公園に入つて、キスをしていた。

「あ、あいつ何してんだよ。」

洋介は浮氣をしていた。信じられなかつた。俺は何も言葉に出来ずに帰つた。

家に着いた途端、怒りがこみ上げてきた。

「ふざけるな、桜をなんだと思ってんだ！許せない。」

いくら気持ちが弱い俺でも、この時だけでキレた。

電話で洋介を呼び出し、

10分くらいしてから洋介は何食わぬ顔で表れた。

「やつほう いきなり呼び出してどうしたんだよ？？悩みでもでたのか？？」

「・・・・」

「おーい！ハル！聞いてんのか？」

「お前、浮氣してんだろう？？今日知らない女とキスしてたろ？？」

洋介はちょっと驚いた顔をした後、冷静に答えた。

「バレた？？確かにあれは桜じゃない！！違つ女だよ！」と笑いながら言つた。

「お前・・・桜をなんだと思つてんだ！お前桜を幸せにするつて言つてたじゃねえか！なんで浮氣なんかすんだよ！桜がどんだけ傷つく思つてんだよ！————！」

そう言つて俺は殴りかかつた。

洋介を押し倒して何度も殴つた。
洋介は、なぜか抵抗しなかつた。

「好きだよ、桜のこと好きだよ。桜のこと好きだけど、桜はお前の事が好きだ！」

俺は、あ然とした。

「お前な、くだらねえ理由つくるなよー」

「お前に俺の気持ち分かるかよー！俺はどれだけ辛かったか分かる

かよ、毎日毎日桜どこ飯食べても、デートしてもお前の話しか出てこない。ハルは昔から泣き虫だとか、ハルは喧嘩弱いとか、ハルは不器用だけど優しい奴だとかそんな話されて俺はどうすればいい？？」俺は、信じれなかつた。そんな話信じたくなかった。

「ハル？お前気付いてないだろ？俺に見せてる笑顔と、ハルと一緒にいる笑顔全然違うこと気付いてないだろ？桜を心の底から笑顔に出来るのはお前しかいないんだよー！俺は多分そろそろ振られる。それが怖くて浮氣してしまつた。ごめん！」

洋介の目は嘘をついていなかつた。真っ直ぐ俺だけを見ていて全て本当のことだと分かつた。

「そうだつたのか。」俺は洋介を立たせて謝りつとした。
だけど、

「俺に何か言つ暇あつたら今すぐ桜のどこに行けよー！ハルの気持ち伝えて弱い男じや無くなつた証拠見せてみろよー！」と洋介が言った。それに対して、俺はゆっくりと頷き、走つてその場を後にしてた。

走つている最中、もう洋介が浮氣したことなんて、どうでもよかつた。俺は

「桜・・・・・ごめんな」そう咳いて全力で走つた。

桜の家には向かわず、まず桜の木に行こうと思つた。桜の木がだんだん見えてくると、誰かが立つている。

「桜？？」俺は足を止め、ゆっくりと桜の方に歩きました。桜もようやく俺に気付いて、

「ハル？？なんでここにいるの？？」

相変わらず笑つていた。

「ちょっと桜に話があつてな

「洋介のこと？？」

「うん」

「洋介・・・浮氣してたんでしょ？？」

「え？」

「何で桜が知ってるんだ？俺は不安になりつつも、
「うん、でも何で桜が知ってるの？？」

桜は・・・少し考えて

「うち、知つてた。洋介が前から浮氣してたの知つてたよ。

「何で洋介に言わなかつたの？？」

「・・・うちが悪いから、うちね・・・ずっと・・・」

桜の声が震えていた。

「ずっとね・・・」次の言葉を言いかけた瞬間、俺は桜を抱きしめた。
「もう何も言わなくていいよ。分かつてるから、桜の気持ち分かつ
てるから。」

「ハル・・・ごめんね。」桜は、今にも泣きそうになつていた。

「桜に先に言われてたまるかよ！笑 桜？俺、桜の事が好きだ。
この桜の木の下で、桜に告白するのが夢だった。謝るのは俺のほう
だ。」ごめん

桜は、笑っていた。

洋介が言つていた桜の笑顔。今考えると確かに、桜の笑顔は洋介に
見せる笑顔と違つて、俺に見せる笑顔が特別に最高だ。 「うちも
好き！！でも、桜が咲いてる時に告白してほしかつたなあ ハルが
鈍いから悪いんだぞ！..」

「うるせえ・・・！」

俺は、必死に涙をこらえていた。

今日で、泣き虫は卒業だ。俺と桜はベンチに座り、手を繋いだ。桜
が咲いてる頃は、手を繋ぐなんて考えもしなかつた。

「あつ！いい事考えた！！ちょっと来て！」桜は急に立ち上がり、
俺を桜の木の裏に連れて行つた。

下に落ちている石で、相合い傘を書いた。

「いい感じでしょ？？」

「桜・・・相変わらず字汚いな。」

「ええ―――！？ひどい！！桜の力作なのにい」

「はいはい、良くできました！！」そう言って桜の頭をなでた。

その相合い傘を書いた横に、タバコの火が押し付けられている後があつた。

「あ、あの時の・・・」

すると、桜が鞄から絆創膏を取り出し、その部分に絆創膏を貼った。

「これでOK」

「うん！ありがとな」

「桜が咲く瞬間、一人で見にこようね――きつと満開の桜を見ることが出来るよ！」

「そうだな！約束！！」

そう言って、指きりげんまんをした。

そうして、少し照れながらも一緒に帰った。毎日毎日幸せな時間を過ごしている。

「俺はなんでこんなに幸せなんだろ。」そつそつやきながら学校の帰り道桜と一緒に歩いていた。

夏休み前ということもあって浮かれていた。

桜に冷たい目線で見られていても幸せな気持ちで溢れきっていた。

「ちょっとハル！近づきすぎ！近いよ！」

「ばあか！付き合ってんだから当たり前だろ――！」

桜は少し照れた表情を浮かべて

「それよりも、夏休み補習しなくていいためにもちゃんとテスト勉強してんでしょうね？」

「・・・・・・・」

テストがあるという事を忘れていた。

「だ、大丈夫だよ！楽勝だあ」

冷や汗をかきながらもなんとかごまかした。

「もう――夏休みは遊園地いく約束なんだかんね！――補習でつぶれたらどうなるか分かるよね！？」

幸せな気分から一気に複雑な気分になつた。

俺は帰つてから必死に勉強をした。

赤点を取らないために、桜と遊園地に行くために。

結果は・・・最悪だつた。桜は俺の顔を見た瞬間、不機嫌な顔になつた。

「ハル君赤点とつたんでしょ？？」

なんだか桜の表情が怖い。

「ごめんなさい！！でも頑張つて勉強したんだ！！ちゃんと補習終わつたら遊園地行くから許して下さい！！」

桜は無表情だつた。

「うちがどれだけ楽しみだつたか分かる！？バカ！！もう知らない！」

桜は怒つて教室をでていつた。

「ドンマイ！！」

和樹と洋介だ。

「しようがないって！なんなら俺らと一緒に遊園地にいきましゅか？？」

ちょっと腹がたつた。

「うつせえな！お前らと遊園地行くよりなら家で鼻ほじりながらテレビ見てた方がマシだ！！」

みんな爆笑してる中桜の後を追つために教室を出た。
自転車をこいでいると桜は一人で歩いていた。

「桜！！」

桜は聞こえないフリをして歩いていた。

「桜ちゃん！？桜つぺ！！」

何度も呼んでも無視された。

「うちの機嫌直してくれなきゃ もうハルに会わない！！」

そういわれて、すぐに桜を自転車の後ろに乗せて、あの場所に向かつた。

桜の木。

だが、桜の機嫌が直らない。

「機嫌直んないよ。桜咲いてないもん。」

そこで俺はある決心をした。

「じゃあ目閉じて桜が咲いてるのを想像して？？」

そして、キスをした。少しあたりが暗くなつた夕焼け空の中で桜と

初めてキスをした。
「ほら 桜の顔に桜が咲きました」

「…・・・・・ちょ・・・バカ！！な、何してんの？？」

桜の顔は真つ赤だつた。

「ほら 桜の顔に桜が咲きました」

そう言つた瞬間二人で大笑いした。

お互い照れながらも笑顔に満ち溢れていた。そして、桜の不機嫌は吹つ飛んだようだ。

遊園地は行けなかつたものの、夏休み後半は夏祭りに行つたり、二人で勉強したりなんかして楽しく過ごした。

この夏は忘れられない思い出になつた。

秋になり、少し寒くなつてきた。

休日に寝ながらテレビを見ていると、桜からメールがきた。

「二人でホムペやらない！？（、・、）」

「ホムペ！？全然いいよん」

ホムペとかあまり興味無かつたがとりあえずやる事にした。何で顔文字が怒つてるのかは、分からなかつた。

すると、桜が作った一人のホームページが送られてきた。

ホームページの名前は、

「ハル桜の木」

なんか嬉しかつた。

「ちゃんと毎日書くんだぞ」

桜からのメールにすぐ返信した。

「当たり前だろ！！一人の幸せなホムペだもんな」

返信した後、すぐ日記を書いた。桜の日記には、いろんな事が書か

れていて、最後に

「幸せ」と書いていた。

俺は、

「桜よりも俺の方が幸せだ！」「一いや一やはしながら書いた。
そんな幸せな毎日が続いていた。

桜と俺は本当に毎日幸せで仕方がなかつた。

ただ、お互にホムペとかあまり長続きするタイプじゃない。
1ヶ月くらいしたらちよくちよくしか日記は書かなかつた。最近は
会つてもあまり出掛ける事はなかつたが久しぶりにデートに行くこ
とになつた。

一人で街を歩いてみると

「ねえ！カラオケ行こうよ！」と桜がハイテンションで言つてきた。
・・・まずい俺はめちゃくちゃ音痴だ。
「い・・・い・よ。」

桜の誘いを断ると後が怖くて断れなかつた。

だけど、実際桜の歌聞いてみるとめちゃくちゃ音痴だ。

「わあーうちはなんて歌上手いんだろう それに比べてハルはめち
やくちや音痴だね！」

「すみませんね！！」一瞬イラつときた。

だけど桜が楽しんでるならそれでいい。

「ねえねえ！SMA Pのオレンジ歌つて
いきなり桜からリクエストがきた。

「いいけど俺めちゃくちや音痴だぞ！」

「いいの ハルが歌つてくれたら嬉しいもん

「任せとけ！！」

歌いはじめて俺はめちゃくちや音痴だと「う」とが恥ずかしくて桜
を気にせずに熱唱した。

「やつぱりこの曲いいね ありがとうー」

一瞬桜の目がウルウルしてるように見えた。
だけどあまり気にならなかつた。

「こつでも聞かせてやるよ！…」

「じゃあうちが聞きたいときに絶対歌つてね」

「分かったよん！」

その後プリクラをとつたり焼き肉を食べたりして、楽しい一日を過ごした。

桜を家に送つて、帰ろうとしたとき、突然桜が玄関から

「ねえ！？」

「ん？？」

「うちらずっと一緒によね！？」

いきなりの質問に俺は困った。

「ばあか！！当たり前だあ　俺と桜はじいちゃんばあちゃんになつてもずっと一緒によね！！なんかあつたらいつでも助けるよーー！」笑顔で答えた。

「ありがとう！氣をつけて帰つてね　」なぜか桜が家に入る姿が悲しそうに見えた。

そして冬が近づいた秋の風が体を震わせた。

ある日、学校に行くと芳江が思いつきり俺の頭を叩いた。

「あんた！！桜になんかした！？」

「へ？？」

わけも分からず桜を探すといつもの席に桜の姿がなかつた。

「桜が学校休むなんて前代未聞だよ！！」

「ばあか！！風邪ひいたんじゃないか！？誰でも風邪くらいひくでしょう！！まあ芳江みたいなバカはひかないけどな！笑」

芳江はもう一発俺の頭を殴つて席に戻つた。

少し心配になつて一応メールしてみた。

「風邪ひいたのか！？」するとすぐに返信がきた。

「うん。まさかうちが風邪ひくなんてね！笑」

風邪と聞いて少し安心した。

「まあ今日はゆっくり休めよ！！大事な体だもんな

」

そうメールして桜がいない学校を過ごした。

その帰りに桜の家にお見舞いしにいった。

すると桜のお母さんがでてきた。

「あれ?? ハル君!! 久しぶりね」

桜のお母さんは俺が入院してるときからお世話をなつている。

「こんにちわあ。あの、桜さん居ますか!??」

「桜今病院なのよ!! もう少ししたら帰つてくれると思ひよ あがつ

ていきなさい?」

「いえいえ。大丈夫です!! 一応顔見に来ただけなんぞ、桜ならすぐ元気になると思うので大丈夫です!」

「あらそう?? ジヤあまた今度いらつしゃいね」

帰つてる最中、病院帰りの桜にばつたりと会つた。

「桜!! 元気そうじやん!! 明日から学校くるの!!?」

桜は笑顔で

「もちろん 当たり前でしょ!! 「ゴホッ」「ゴホッ」

桜の咳が気になつた。そして一瞬だが、薬が見えた。ぜんそくの薬を持つっていた。

「桜。ぜんそくもぢだつたつけ!!?」

「え?? なにいつてんの?? ただの風邪だよ!! それよりも今日は寒いから早く帰りな ジヤあね!!」

ちょっと強引に桜は帰つていつた。

あの桜の咳、俺のぜんそくの咳に似てる。体調もそんなに元気そうではなかつた。

俺はとても不安になつた。

次の日から桜は学校にきたが、ずっと咳はしてしきょくしきょく学校を休むようになった。

それから俺は毎日お見舞いに行くようになった。

そんな日が続いて冬がやつてきた。こつものように桜のお見舞いにいつた。

「いつもごめんね!! なんかこの風邪しつこいんだよね!! 全く

う 桜様に喧嘩売りやがつて!!

俺は思いきつて聞いてみた。

「桜……本当は風邪じゃないだろ？」

「もう！なに心配してんの！？心配性だね？」

「似てんだよ！俺がぜんそくだった時と、体調も悪いし咳が止まらない。学校も来れないじゃんか！！隠すなよ？？」

「うちがぜんそくなわけないでしょ！？なんで疑うの！？」

「疑つてないよ！…ただ・・心配な・・」

「もういい！…帰つて！眠いから寝る。」

「……桜」

俺は何も言えずに帰つた。

すると

「ハル君！…」

桜のお母さんだ。

「話があるの。」

「なんですか！？」

「桜は風邪つて言つてるけど違つの！…ぜんそくなの。症状がでたのは最近だけど実は昔から桜もぜんそくだったのよ。」

「え？？」

言つてる意味が分からなかつた。

「今まで全く咳はでないんだけど、昔はハル君と同じくらい咳でてたのよ？？でも子供の頃ハル君だけには言わないでつて言われたの。ハル君のお見舞いいつた後も家に帰つてからずっと咳もしてた。体調が悪いときもハル君のお見舞いには行くつていつも張り切つてたのよ？？本当に最近からまた症状がでてきて、私もびっくりしてるの。」何も言えなかつた。桜が昔からぜんそくもちなんて知らなかつた。俺の中では、昔から体が強くて俺をいじめてた桜が、俺と同じくらい重いぜんそくをもつていたなんて信じられない。

「そうだったんですか。」

「隠してごめんなさい。あの子にとつてハル君は特別な存在なのよ？同じ病気抱えていて辛いときは私が助けるんだって今でも言つて

る。それ程ハル君が大好きなのよ。だから許してあげて？」

涙がしてきた。

なんでだろう。

桜が重いぜんそくをもちながら俺を励ますために毎日お見舞いにきてたなんて。

俺はなんで気付いてやれなかつたんだ。
そして俺は何をしてやればいいんだ。

俺は何も言わずにその場を立ち去つた。全力で走つた。

雪チラチラと降つてる中俺は走つた。

久しぶりに桜の木の所にきた。

「なあ？？？俺どうすればいい？？桜を助けたいよ！－！教えてくれよ！－！桜の木！－！」

桜の木に雪がかぶさつてなにか苦しそうに見えた。何も答えてくれない。

まだ涙は止まらない。

「桜のバカやろ－－－－－。なんで隠してたんだ？なんで？なんで俺を励ましてきた桜が俺と同じぜんそくもつてんだよ！－！なんであんなに強い姿見せる事できたんだよ！－？辛かつたはずなのに・・・・これ以上症状が悪化しないでくれ・・頼むから！俺が今度は励ますから！－！だから桜の木も桜を助けてくれ！俺の大変な人を・・・・助けてくれ。」

それから俺は桜の木の下で立ち尽くしていた。

次の日、桜は入院した。

俺は迷つていた。

桜に会つていいのか、分からなかつた。

だけど自然に病院に向かつていた。

そして驚いた。桜の病室は昔俺が入院していた部屋と同じだった。401号室、窓からは桜の木が見える。

ドアを開けて見えたのは意外にも元気そうな桜だった。

「ハル！－！来てくれたんだ ありがとー！－！昨日はごめんね。」

「うん。俺こそごめんな！…」

「あのね・・・ハル。」

「言わなくていい！」

俺は桜が言うことは分かつていた。

「もう大丈夫。今までよく一人で頑張ってきたな！…だけど次は俺が桜を励ます番だ。今度は俺が桜に強い俺を見せる！俺だけじゃない！桜の木も一緒に。大切な人を守るのは当然だもんな！…」

桜は泣いた。ベッドの上で俺でしがみついて泣いた。

俺は涙がでそうなのを唇を噛んでこらえて力いっぱい抱きしめた。

「ありがとう。ハルは神様みたいだね。ハルはうちの神様だよ！…うちを助けてね」

「当たり前だ！…言つたろ！…じいちゃんばあちゃんになつてもずっと一緒にだつて！…？」

「違うよ！…天国にいっても一緒にもん！…」

俺の桜をほっぺをつねつて笑つた。

「春になつたらまた一緒に桜の木見に行こうな！…」

「うん！…約束！…」

そして、それから毎日毎日お見舞いにいつた。桜のために吹雪がきてお見舞いにいつた。

12月23日、俺は桜のお母さんに呼ばれた。

「今お医者さんから話聞いたわ。桜結構症状重いらしいわ。だからもしひどい咳が止まらないときは危険かもしれないって……」

桜のお母さんは泣きながら話してくれた。

「大丈夫ですよ！…桜にそんなことあるわけないじゃないですか！？桜は強いんですよ！…桜は絶対また元気な桜に戻ります！それまで俺が桜を励まします。」

「ハル君・…あの子を助けてあげて。」

俺は前みたいに不安なんてなかつた。

昔、桜が励ましてくれたように俺が励ませば絶対に元気になるはずだから。

病室に戻ると桜は寝ていた。

俺は帰る準備をして片付けをしているとベッドに桜の携帯が開いたまま置いていた。

その携帯を見ると宛先のないメールを桜は送ろうとしていた。
「死にたくないよ。神様・・・助けて下さい。私はまだハルと一緒にいたい。まだ幸せを半分しか実感していません。死ぬのが怖いです。だから助けて」

本文にそう書かれていた。

俺はその本文に

「分かりました。絶対に助けます。」と打つて桜の枕の横に置いて帰つた。

12月24日、桜は元気がなかつた。

「今日は元気ないね？？」と聞くと

「うん・・・今年はサンタさんこないのかなあ・・・」

俺はブツとふいてしまつた。

「なによう！？笑つたなあ！？！」

「桜がサンタさんなんて子供みたいだね！？」

「うるさい！？！どうせ来ないもん！！」

「大丈夫だよ 絶対くるからちゃんと信じなさい！？」

「・・・はい」

その日、どうすれば桜が明日喜ぶかずつと考えていた。

そして、12月25日。

先生の許可を得て桜を桜の木に連れて行つた。

「ハルー 寒いよう！？なにするの！？」

俺は桜の木を指差して

「なんか後ろの絆創膏膨れてない！？」

「えつ？？」

桜は驚いた顔で絆創膏が張られてる場所に走つた。

俺はニヤニヤしながら桜を見ていた。

絆創膏をめぐると小さな袋が落ち着いていた。

その袋を開けてみるとひとつひらの桜と桜の形をした指輪が入っていた。

「そのひとひらの桜は俺が入院していたときの桜だよ もう枯れてるけど昔桜と一緒に落ちてくる桜を取り合って、俺がやつととつたやつ！俺にとってはすごい大切なものの、そしてもうひとつは指輪だよ！—喜んでくれた？」桜は無言でこっちを見つめていた。

「ダメだつた？？」
「ダメじゃない！！喜びすぎちゃよ
ハレアリがとう！！人生で最高

のプレゼントだよ ありがとう……。だあこすきーー。」

「わーいたしまして！」

俺はとても嬉しかった。

「ウルム」

桜は最高な笑顔で答えてくれた。

「桜がないと学校つまらないよ。早く退院してね！－また一緒に

「よしえ・・・・桜嬉しいよ。ありがとー。」

なぜだらつ・・・田が追う」とに不安な気持ちがでてきた。

来年は元気な姿で毎日過ごせねばならない

症状が悪化したらどうすればいいんだろう。

今は妾に元氣を取れる事が俺の出来ることだ。

年が明けた。

年が明けてから様の体調が悪くなってしまった。ひどい咳が続き、俺と話すのもつらそうだ。

「桜！頑張れ！！大丈夫！！絶対良くなるから 辛いのは今だけだ

六二

「ゴホッゴホッ・・・ありがとう・・頑張る・・ゴホッゴホッ」

最近はずっと桜の手を握つて辛そうな桜を見つめてるだけだ。

最近は食べ物もあまり食べない。

そして俺が病室に入るとき、桜は必ず窓の方を見つめている。

「桜。お茶飲めますかあい！？おいしいお菓子も買つてきたよ！？」

「ありがとー！…食べる食べる」

辛そうに食べるのは明らかに分かる。

すると桜が

「ねえ！？」

「どうした！？」

「もしうちが死んだらどうする！？」

「ばあか！…んなわけないだろ 桜が死んだら神様殴る！…一緒に

春に桜の木見るんだろ！？」

「そうだよね ごめんなさい・・」

「桜の木だつて支えてくれてるだろ！？だから絶対負けたりしたらダメだよ！？」

「うん！…絶対負けないよ！…うち強いもん この桜の指輪があれば大丈夫！！」

「特別な力ある指輪なんだからなあ！…」

久しぶりに元気な桜と話して嬉しかった。このまま2月も過ぎて3月。

春がやつてくる季節。

体調のいい日は一緒に桜の木を見に行つたりしてたが、3月に入つて体調のいい日はない。

ひどい咳と具合が悪い日が続いて、ベッドからでものも辛いくらいだった。

俺はお見舞いにいきたくなかった。これ以上弱つていく桜を見たくない。

その日、俺はお見舞いに行かなかつた。

次の日、病室に行くと桜はいなかつた。

病室をると、桜のお母さんがいた。

「桜は集中治療室に移つたわ。なんで昨日来てくれなかつたの！？
桜ずっと待つてたのよ！？」

「すみません！俺これ以上桜が弱っていく姿みたくないんです。
パチン！！」

桜のお母さんにビンタされた。

「なにいつてるの！？！？あなたは何のために今までお見舞いに
来てたの！？助けるためじゃないの！？元気あげるんじゃないの！
？あなたが元気あげないで誰が元気あげるの？？」

「もうやめなさい」桜のお父さんが止めに入つた。

「すみません。」

「桜はね、昨日ずっとハル君の名前呼んでたの！？ハル・・ハル・
一人はやだよって。あんなに強い子がここまで弱い姿を見せれるの
はハル君だけなのよ？？ハル君が入院してた頃あの子が寂しい思い
させないために毎日来てたのよ！？次は俺の番だつて言つてたじや
ない！？早くいってあげなさい！ハル君を待つてるから。」

隣にいたお父さんが

「ハル君。私たちはもう覚悟はできる。だけどもし、これから桜
が元気になれる薬があるとしたらそれは君の存在だ。君の存在が桜
の生きる価値なんだよ！？行きなさい。」

桜のお父さんもお母さんも泣きながら話した。

「分かりました！！」

俺は泣きながら桜のいる所へ向かつた。

ドアを開けてみると桜は苦しそうにしていた。

「桜・・・『じめんな・・俺桜の弱つてる姿みたくないくて、最後の最
後に逃げた。俺やっぱり強くない。桜のためになにもしてやる事が
できなかつた。だけどまだ桜と一緒にいたいんだよ！？まだやりたい
ことが山ほどあるんだよ！だから頑張ってくれ！？」

すると桜は手を握ってきた。強い力で握ってきた。とても暖かい。
苦しみながら桜の目が涙がポツリと落ちた。

「ハル・・・ハルは強いよ・・・ハルとまだいたい。だけど・・・ごめんなね。最後のお願い聞いてくれる!?」

「お願い!?」

「うん・・・集中治療室じゃなくて401号室に戻りたい!ハルが昔いたあの病室に戻りたい。窓から桜の木がみたいよ・・・」

「・・・桜」

俺は桜のお母さん、お父さん、医者に事情を説明して401号室に桜を戻してもらつた。

桜は未だに苦しんでいる。

するといきなり桜が必死に口を開いてS M A Pのオレンジを歌いだした。

「人並みの中でいつの日か偶然に出会える事があるのならその日まで、さよなら僕を今日まで支え続けてくれた人、さよなら今でも誰より大切だと思える人、そして何より一人がここで共に過ごしたこの日々を隣にいてくれたことを僕は忘れはしないだろう。さよなら・・・消えないように。ずっと色褪せないよ!」。ありがとう。ハル・・・

・

みんな泣いている。

だけど俺は泣かない強い俺を見せるんだ。

「桜!..頑張れ!!まださよならなんかしゃないよ!..」
どんどん症状が悪化していく。

「桜!..桜とまた桜の木みたいんだよ!笑顔みたいんだよ!元気な姿をみたいんだよ!..まだ早いよ!..俺の元気全部やるから!..ダメだつて!..」

桜の目が閉じていく。

そして桜が死んだ。

俺は必死に泣くのをこらえた。絶対に泣かないって決めていた。でも無理だった。

涙がどんどんでてくる。

「桜・・・よく頑張ったな。」

俺の涙が桜の人差し指につけている指輪に落ちた。

葬儀の時、俺は桜の部屋にいた。

そして、色々な事を思い出していた。

ふと思い携帯をとりだしてハル桜の木の一人のホムペを見た。

するとなぜか桜が死ぬ2日前の3月20日に日記が書かれていた。

「なんで・・」

見ようか迷つたがその日の日記を見てみた。

すると

「ハルへ。まさかうちが死んじゃうなんてね 笑 ハルを置いて先に死んじゃう桜を許して下さい。助からないって分かつてた。でも逆にハルがいたから、うちはここまで生きれたと思う。

本当にハルに出会えて良かった。もつとハルとしたい事があつた。じいちゃんばあちゃんになつてもずっと一緒にいる約束守れなくてごめんなさい。生まれ変わつたらまたハルに会いたい。またハルと色んなことしたい。

大好き。今日ハルはお見舞いに来なかつたのは、うちが弱い姿みせてるからだよね・・・。『ごめんね！でもハルは弱くなんかないよ！

！本当に強くなつた。もういじめることが出来ないのが残念！！笑この世に神様なんかいないよ！！だつて神様はハルだもん クリスマスプレゼント嬉しかつた。天国でも指輪つけるからね。そして桜の花も持つていく。死にたくないよ・・・怖い。でも携帯に助けるつてメール打つてくれたのはハルだよね？？めちゃ嬉しかつた！！本当にありがとう！！うちがいなくなつても寂しいなんて思わないで！？

うちに会いたくなつたら桜の木において！？うちはいつもそこでハルを待つてるから！こんな桜をずっと守つてくれてありがとう。幸せでした。ハルという素晴らしい人が桜という弱い人間に元気を与えてくれて毎日毎日幸せだつたよ。うちはまだ戦うよ。死ぬときは頑張つてオレンジ歌うから。うちの気持ちだから受け取つて！！最後に・・・・・・あなたを愛しています。』『桜・・・桜』

俺はもう顔がぐちゃぐちゃになるくらい泣いた。桜の暖かい気持ち
が俺に伝わった。

「桜・・ありがとう。」

葬儀が終わった後俺は桜の木に向かつた。

「来たぞ桜！」

ちょうど桜が咲いていていた。

そして生暖かい春の風で桜の花びらゆりゅうりと揺れる。

それが桜の笑つている顔に見えた。

「桜！俺も愛してる！じいちゃんになつてもいいじゃんよー。」

桜の木に手を触れて桜のぬくもりを感じる。

そしてまた俺はいつもの道を帰つていく。

その後ろ姿を桜の木はいつまでも見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6140e/>

桜の木

2010年12月8日17時19分発行